

長谷川 望牧師

*イエスが死んでよみがえられたことの証明は、その姿を弟子たちの前に現わされたことである。イエスはマグダラのマリヤに先ずあらわされた。彼女は、「七つの悪霊」(恐らく心身の重病)を持っていたがイエスによって直された、と記されている(ルカ8:2など参照)。マリヤは再び墓の所に行き、中をのぞき込むと、二人のみ使いが座っていた。彼らとの会話の後、うしろを振り向くとイエスが立っておられるのを見た。しかし、それは園の管理人だと思った。イエスだとわかったのは「マリヤ」とイエスから呼びかけられた時であった。私たちを造られた神は一人一人のことをすべてご存知である。その神が名前を呼んでくださるのは、愛の現れである。礼拝や集会に、また様々な働きや奉仕に、名前を呼んで招いてくださるのである。自分の意志ではない。また、悩む時、つらい時にも声をかけてくださる。

*イエスは彼女に言われた。「わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないからです。(ヨハネ20:17)「すがりついては」と訳されているのは、すでにマリヤはイエスにすがりついているので、放しなさい、という意味である。主イエスの救いのわざは、十字架の後、復活、昇天、神の右に着座と続く。今はまだその途上にあるのでその邪魔をされては困るという意味があるだろう。また、これから父なる神のもとに上り、からだが見えなくなるので、見えるものだけに頼るのは良くないということをイエスはマリヤに諭しているとも考えられる。いずれにせよ、主イエスが最初に復活の姿を現されたのは女性の、マリヤであったことを覚えておきたい。

*その日、すなわち週の初めの日の夕方のことであった。弟子たちがいた所では、ユダヤ人を恐れて戸がしめてあったが、イエスが来られ、彼らの中に立って言われた。「平安があなたがたにあるように。」(ヨハネ20:19~20) 栄光のからだに変えられていたイエスは復活の日のその夕方に弟子たちの前に現れた。手や脇腹の傷あとを見せられ、弟子たちは哀しみの真ただ中から歓喜の中へ180度の転換であった。「平安」は「イエスの平安」であり、世の中が与える平安とは違う。「イエスの平安」は、現実的な恐れや不安を取り除く一時的なものではなく、十字架の贖いによる神との平和、復活による永遠の平安である。すなわち神との真の交わりができる「魂の平安」を弟子たちにすでに約束されていた(ヨハネ14:25~27参照)。その「平安」とともに弟子たちに与えられる「聖霊」が福音伝道の力となる。私たちも、主の十字架を見て、復活の主に出会えば力を与えられるのである。